

川瀬一絵

川瀬一絵は写真家。ベテラン枠で参加。研究所の記録写真がどうあるべきか、首をかしげながら、撮ったり撮らなかつたりする。

はつゆめ

二〇一六年の初夢は、朦朧としながらとぎれとぎれに見ていた。なぜ朦朧としていたのかというと、現実にいる場所は深夜の分娩室で、お産の最中なのは私ではなくて私の妹だったのだが、妹は子宮の収縮と産道開通の激痛に苦しみ、生まれてくる子を外の世界で保温するための母体の機能により、微熱に悶えていた。そして私は、苦しそうな彼女にうちわで風を送りながら、本当に申し訳ない話だが、なんということか睡魔と戦っていたからだった。

妹にかかっているタオルケットの赤っぽい花びら模様が、夢と混ざってなにかわからぬ。夢の感覚を思い出そうとするが、すうっと消えていく。薄明るいオレンジ色の照明と、独特のにおい、妹の息づかい、助産婦さんと母。ストーブの音。

数時間後、赤ちゃんは生まれてきた。そのときはさすがに睡魔には打ち勝っていたけれ

ど、思い出す映像は夢のなかみたいだ。カメラで映像も撮ってはあるが見返していないし、どうしてもというきっかけがない限り、見ないと思う。音と色温度の情報を思い返すことができれば、おなかいっぱいな出来事だった。

これまでもこうして人が生まれてきているのに、ドラマでもなんでも出産シーンが大抵おきまりの表現であるのは、それなりにグロイからという理由だけではないように思った。第一子の出産に二日を費やした難産経験をもつ妹が、再度自然分娩を選択するわけそのあたりにあるのかもしれない。数日後、妹にそのことを聞いてみたら、痛さはもう忘れてたと言っていた。

つくりかた研究所

つくりかた研究所の三年間を思い出そうとすると、これもまたすうつと消えそうになる。理由は絶対違うが、通じる場所があるように思う。

この研究所は、本体の体裁よりも本体の熱が外界に触れているばかりとしたあたりで活動をしていた印象だ。それほど芯の部分を大事に守っていて、かたちを示そうとしなかった。御神体みたいである。簡単に体裁を整えるわけにはいかねえぞという態度でさえあった。共有されていたのは、「だれかのみたゆめ」ということばと、蟹気楼を吐き出すハマ

グリのイメージ、それから「つくりかたから考える」という意識。「つくるもの」は、それぞれの興味・趣向に任されていた。研究員たちは、ふだん感じているなんらかの違和感や、各々が抱えている問題を昇華させること、それを考える場所や同志に会うことを期待して、この研究所に集まったのだと思う。

そのころの私は、写真の依頼に応えることに必死になっていた時期だった。写真は良いところだけを限定して抽出できるし、光や色などをコントロールすることでイメージの操作ができる。実物にスパイスを利かせるための技術を、私は撮るものに対しての自分のテンションをおいてけぼりにしたまま、体裁を整えるために使う、という落とし穴にはまってしまっていた。求められるイメージにテンションが上がらないわけは、自分の価値観が異なるからなのか、実際のところ良くもないからなのか。その違いを見据えることもできず、器用なフリをして自分を見失いかけていた。

写真はそこにあるものありきで、単純に反応して撮りたい。イメージを合致させるためにがんばることへの違和感を感じつつ、あるイメージを切り取るために無視している、フレームの周辺の出来事が気になっていた。だが、悶々とするのは自分の解決能力のなさに問題があって、既成概念ではなく、いま起きていることや、いまのムードを汲みとった発想を提示して答えを出さなければいけないところだった。

そんなところに、長島からつくりかた研究所のお誘いがやってきたのだった。研究所への参加を決めたわけのひとつは、いわゆる「良いかんじの写真」が求められていなかったことである。

プロジェクトの実態が未知であるのは、不安も感じたがそれ以上に魅力的だった。この研究所の写真撮ること自体が、自分が少なからず習得してしまっている撮りかたを一回捨てて、真の撮りかたを研究することになりそうな期待があった。

もうひとつは長島の不思議な感じである。それまで私の知る、ものごとを動かしていくひとつというのは、大体声が大きくてみんなを盛り上げ、巻き込んでぐいぐい引つ張っていくようなタイプだった。楽しく頼もしい一方で、雰囲気で牽引するのでそれを壊しにくい空気が生まれ、周辺の小さな意見や感覚が表に出にくい面もある。長島は小さな声で淡々と、確かに思っていることを声にして発するような話しかたをするひとだ。ちよつと変わったペースと、丁寧な態度で。そんな長島がつくろうとしているつくりかた研究所。おもしろそうだった。また、私が衝動的に撮っている写真を見て研究所に召喚してくれたので、お断りするわけがなかった。

こうして、このへんてこな研究所に参加していることが、自分の制作活動のよりどころのようになっていた。この「よりどころ」というのは、拠点というよりは精神的なことだ。

作品をつくる衝動や動機をおさめておく場所のような、またはできた作品をノックして開いたらそこへ行けるようなイメージである。ほかの연구원たちも、つくる場所はそれぞれ研究所の内外にもついでいて、そこでおこなっているつくりかたを捉え直したり、一から（あるいはゼロから）始めたりすることが暗黙の任務になっていったようにも思う。

説明しにくい、こういうへんところが本当に存在しているんだぞ、という事実は心強かった。でもそれが理解してもらえないうちは、ただの逃げ口ともいえるので心もとなかった。

研究所の活動は、まったく進まないように見えた。せつかく私の好きなバスに関する企画が動いていたのに、消えた。のちにそれは意図あつての策だったと知るが、ひととお金を動かしてやってきたことがなんの成果物にもならず消えたことに衝撃を受けた。だがこれも、「既存のつくりかた」が染み付いている証拠なのだった。間違いに気づいたらやめる。訂正する。これは正しいことなのだ。

のちに、いろいろな研究室が立ち上がって活動を始める。ちよつどつくりかた研究所にノックするドアが何方向からも立ち上がったような感じだった。

つくりかた研究所の写真を撮る研究

つくりかた研究所のドキュメント写真は、周辺の出来事をすくい上げていって集積して全体を見るしかないなと思っていたが、これは私個人の作品制作のアプローチとも同じだ。コンセプトを決め込む前に周辺や細部から収集していって答えを導き出すようなつくりかたは、まったくもって効率が悪い。それでもふと気づいて捉えるプロセスを優先している理由は、限定して周りを見落とすのが恐いし、自由に捉えるほうが楽しいからだ。それにそういうふうに見つけるものにはどうしたって真実味がある、という強みがあるのである。この撮りかたは、つくりかた研究所に合っていた。

一目で説明できるものも、なんの説明にもならなさそうなものも、なんでもあっていることにして、ただ撮るときや選ぶときに、「なんか良い」と思うものをつかまえることに集中した。「なんか良い」は、きつと本質的なものだと思っているが、自分がフラットに構えていないとキャッチしにくい。捉われているものがあつたり、構図などの画面を成立させることばかり考えて写真を撮ろうとしていると見逃してしまう。「なんか良い」が見つかったときはテンションが上がって、今日はこの席から撮ろう、と座り込んでいても立ち上がって撮りたくなる。そういう衝動を頼りにした。研究所の場合は、「コレハナンデスカ？」と「しょうがないなあ……（笑）」の衝動バージョンも含む。

アーカイブの場合、とにかくたくさん量の量があるほど精度が上がるということを、研究員のササキに教わった。それは確かに正しそうだ。だが私の場合、むやみにたくさんあつても精度が下がるだけだということを、ふだんの撮影から身をもって知っていた。たくさん撮るのだが、のちにセレクトする際、あそびの幅をもたせて選んだとしても、言い得ている写真は絞られていくからだ。

一年目の全体会では、複数の研究員たちが写真や動画やボイスレコーダーで音声を録っており、記録への熱意を目の当たりにしたこともあって、安心して「むやみに撮らない」をやってみた。「いっそ撮らない」ということまでやってみてしまった。

たまに拠点に行くと、メンバーはいろんなことを言ったりやったりしていて、ある意味バラバラであったが、つなげて会話をしていく様子からは、丁寧な態度がうかがえた。私はその場に参加しながら、たまに写真を撮るといふ具合だった。

「なんか良い」を私の視点だけではなく、研究所と共有することも必要だし、会って話すから共有できることは結構ある。それから写真の量のためにも、たくさん拠点に顔を出せなかったのが反省点。

だれかのみたゆめ（記念写真）

二〇一四年の暮れに行われた『だれかのみたゆめ 展示と実演』。途中成果発表会のイベントだが、私は研究室の進行状況をほとんど知らずにいたので、観客と同じ状況で会場にいた。そしてそれぞれの展示や出し物を新鮮に楽しんでいた。

写真はいつものように撮っていたが、なにげに使命感を感じて撮った写真があった。集合写真である。

「集合写真を撮りましょう！」というのは、どこか恥ずかしい。みんなも渋々という感じで応じてくれる。ひとの顔が並び、まわりの景色が写し込まれ、日付と場所が添えられている、おもしろみのなさそうなおきまりの一枚。背景の時代やいろいろな記憶を重ね合わせながら見始めるが、ひとによって思い出す記憶や核となる想いは異なる。そしていつの間にか、「集合写真」のデジタルではなく、想起した別のものを「見て」いる。時間が経つほど威力が増すし、身内ネタでなくても味わいがある。むしろ念が籠っているのを感じて、見ないようにしているくらいだと思う。

この型のあり加減は、特定メッセージを定めないうつくりかた研究所とも似ているように思う。『展示と実演』はいくつかの研究室のアプローチが集積されたものだったが、母型につくりかた研究所があった。

研究所は継続されると思う。少なくとも、私が研究所で出会ったメンバーと話をするときには、つくりかた研究所モードに入りそうだ。このモードを共有していることが強みだから、近いうちに一緒になにかつくりたいと思う。